令和３年度第１回静岡県立看護専門学校学校関係者評価委員会会議録

日時	令和３年５月 19 日（水）午後４時 30 分から午後７時 15 分
場所	静岡県立看護専門学校会議室、Web 会議システム Zoom を接続
出席者 職・氏名	（委員）平賀聖悟（三島総合病院名誉院長） 杉山眞澄（静岡県立大学准教授） 石田盛己（個人）　（委員３名　敬称略、順不同） （学校）鈴木隆一校長、太田眞由美副校長、瀧悟総務課長、長谷川明子看護１学科長、関紀子看護２学科長、廣瀬順助産学科長、勝俣直哉総務課主査
議題	・会議の公開について ・学校自己評価結果について
配布資料	・静岡県立看護専門学校学校関係者評価委員会傍聴要領 ・令和２年度静岡県立看護専門学校自己評価結果

１　結果概要

・静岡県立看護専門学校学校関係者評価委員会設置規程に基づき、委員の互選により委員長を平賀委員に決定した。
・本委員会の傍聴について、資料１の傍聴要領のとおり対応することを決定した。
・学校自己評価結果について、資料２に基づき概要を説明した後、各委員から御意見をいただいた。

２　開会あいさつ

（鈴木校長）

本日は学校関係者評価委員会の開催にあたり、委員の皆様には御多忙のなか御出席いただき、お礼を申し上げる。

本委員会は、学校運営教育活動の改善を目的とし、昨年度に設置され、本年度が２回目の開催となる。従前から学校自己評価を行なってきたが、その結果に対して外部の学校関係者から専門的な御意見をいただき、学校運営の改善に向けて検討し実施に向けて取り組んでいくことを目的とし、この会議を開催する。

評価の対象となる令和２年度については、新型コロナウイルス感染症対策として、４月中旬から５月末までを休校とした。学校再開後も臨地実習等の病院の確保が難しくなるなど、例年通りとはいかない学校運営となったが、学生の学習に遅れが出ないように取り組んできた。本委員会も昨年度は書面による開催とさせていただいた。委員の皆様には昨年度に引き続いての審議となる。本日、令和２年度の自己評価に対して、当校の学校運営改善に係る評価として、忌憚のない御意見をいただきたい。

３　会議の公開について

（勝俣）

学校から概要を説明する。本県の各種審議会については原則公開することとされており、本委員会の審議についても公開の対象となる。今後、会議の公開のほか、本日の議事録等についても公開となるため、委員の皆様に御了承をお願いしたい。御了承にあたっては、資料１の傍聴要領の制定を学校から提案する。御審議をお願いしたい。

（平賀委員）

今日の会議も公開の扱いとなっているか。

（太田副校長）

本日の会議は委員の皆様にお諮りしていないので、非公開で実施している。次回以降公開の扱いとしたい。

（平賀委員）

異議なし。

（杉山委員）

異議なし。

（石田委員）

異議なし。

４　学校自己評価結果について

・学校自己評価結果及び取組状況等の説明

教育理念目標、学校運営等の９大項目について、各項目ごとで、鈴木校長から、現状、自己評価結果、分析、取り組みや改善策を、資料２に沿って説明のうえ、各委員から自己評価結果に対する評価、御意見を順番に伺った。

・委員からの質疑、評価

(1) 教育理念・目標

（平賀委員）

自己評価結果の 2.46 点は、高くもなく低くもなくと言った結果となっているが、より向上を図っていく必要がある。

この学校の教育理念は非常に高く掲げられている。この高い理念を学生のものとするには、どのようにすれば良いのかを考える。現場の活動の状況を踏まえて検討すべきであると感じた。学校運営の中で戦略的に考えて実際に実現していくために取り組んでいくべきである。教員を含めて、高い理念を自分のものとしていくには、自覚とプライドを持たせることができるような方向性が必要である。

この学校はまだ歴史は浅いかもしれないが、例えば学校史などはどうか。学校の歴史などを目に見える形にしてみると良い。この学校がどういった人を輩出しているのか、先輩達にどういった人たちがいるのか、様々な病院などに就職し活躍している人たちがいることも分かる。学校のスクールカラー、歴史を目に見える形にできたら良い。

これは具体化し現実化するのにどうすればいいのか考える。教育理念が高いだけに、皆さんの共有のものとして、また新しく入ってくる学生にも実感できるものとして用意していく必要がある。そういったことについて、この項目では感じた。

（杉山委員）

教育理念・目標については、教員がどれだけ理解しているのか、当事者意識がどの程度あるのかというところにある。

誰かが考えてくれるだろうというスタンスでいると評価が下がってしまうのではないかと思う。この学校をどのようにしていったら良いのかといったことを、みんなで話し合う時間が必要であると思う。

こういった時間を取りながら、どこに問題があり、どういった学生を育てていきたいのか、これを自ら考えていけば、ここの評価は上がってくると思う。アンケートに答えた人がどういう理由で答えているのかというところも気になる。

（石田委員）

この項目に関しては少し疑問がある。１番の「学校の理念・目的・育成人材像は定められているか」、この項目に不適切と回答した人が４人もいる。学校の理念などは、各学科の目標まで含めて、学校のホームページなどにもしっかりと書かれている。こういった状況で、なぜ不適切と回答したのかという点は気になる。

その他、２人の先生方が言われたとおり、教職員全体と学生も含めて、理念・目的・育成人材像といったことを、自分自身の課題として押さえていく取組ということは必要であると思う。

（太田副校長）

少しずつ工夫はしているが、なかなか到達するといったところまではいかない。難しい項目であると感じている。先ほどの御意見を聞き、教職員自らが考える機会が必要であると感じた。先生達で意見交換をする場を設けること、また、カリキュラム改正の時期でもあるので、その点でも見直しを行って行けたら良い。

（平賀委員）

学校の教育理念・目標というのは、学校として一番大切な部分である。学生募集などの実務的な部分に比べてこの部分は評価が低かった。この部分を高い評価に持っていけるとより素晴らしい学校になって行くと思う。

教育理念は高く素晴らしい。その部分の評価がもう少し高くなってくると、学校に対する誇りや、良い学校で働いているということ、学生もそういった学校に入って誇りを持ってやっていけることになると思うので、この部分はとても大事なところである。

先生たちで話し合いの場を持つことも必要である。私は具体策も必要であると思う。それが先ほどの学校史や学校の歴史の部分にある。これは一例だと思うので、話合いの中で何か、具体的に意識改革ができるようなことを考えて欲しい。

（太田副校長）

いただいた御意見にもあったように、教員一同で話し合って、少しでも理解を深めていくといったことも必要であると感じた。引き続き取り組んでいきたい。

(2) 学校運営

（平賀委員）

この項目に関しては、まず、「人事給与に関する規程等が整備されているか」という質問に関して、経営母体が静岡県ということで当然かもしれないが非常に評価が高い。また、「コンプライアンス体制が整備されているか」ということに関しても評価が高い。

一方で、「情報システム化等による業務の効率化が図られているか」に関して評価が低くなっている。これは、すでに意識されていると思うし、非常に難しい分野であると思う。

情報システム化による業務の効率化については、大きな時流でもあるので取り組んでもらいたい。やり方として例えばシステム化委員会というようなものを作って漫然とやるのではなく、プロジェクト的に進めると良いのではないか。学校運営の一番大切な部分は、しっかりと出来ているという評価であるので、良いのではないかと思う。

（杉山委員）

先ほどの平賀委員の意見にもあるように、人事給与等の関係は問題がないと思う。「情報システム化等による業務の効率化」に関しては、どういった部分に実際に取り組んでいるのか。

（廣瀬助産学科長）

infoClipper（インフォクリッパー）というシステムを導入している。学生の時間割管理、成績入力などを一括して管理できるものであり、これを導入することで、複数のソフトやパソコンを使うことなく、複数の情報を一括管理できている。

助産学科は10名という少ない人数ということもあるが、比較的管理し易く使っており、こういった部分では助産学科では効率化の取組を行っている。

一方で、学生の人数は学科間でばらつきがあり、本システムの活用状況にも差があるので、学校全体としては、まだそこまで効率化というところまで到達していないのかなという印象がある。

（杉山委員）
　システムの効率化というのは当事者でなければ分からない部分も大きい。県では相談するところがないのか。

（鈴木校長）
　静岡県としては、専門の部署を４月に立ち上げて取り組んでいるところである。全庁的な取組として進められているので、必要に応じて学校から相談していくことが必要だと考える。
　学校内でどの業務が情報システム化や効率化に結びつけていけるかといった方向性を持たないといけないので、校内で話し合う場を持つこと、県庁とも連携を取っていくことが、進めていく上では必要になってくると考えている。

（太田副校長）
　昨年の休校期間には、学校内のインターネット環境等を整備し、Zoom を使って遠隔授業を導入した。媒体を使った授業なども、先生たちの研修の中でも言われてきている。これからICT を取り入れた授業も求められてくるので、こういった部分も通じてくるんではないか。

（杉山委員）
　私の大学も昨年度は大パニックだった。全てがリモートになり、今までの授業で使っていたパワーポイントに音声を入れただけでは、今までの講義の半分ぐらいの時間で終わってしまう。
　グループワーク等もできなかった。教員自ら現場にビデオを撮りに行ったりし、教材も作った。
　これがこの質問の、情報システム化による効率化に合致するかは分からないが、こういった取組もある。
　どこの部分を効率化していくのかといった具体的なところを検討し、専門の部署に相談をしながら進めていくしかないと思う。

（石田委員）
　各質問項目を見てみると、不適切ややや不適切の評価の方が上回っている部分がある。
　「運営方針に沿った事業計画が策定されているか」、「運営組織や意思決定機能の明確化」等がこれに当たる。これは、職員の間で、学校運営に関して納得しない気持ちを抱えている職員がいるのではないのかな、といった印象を受けた。
　昨年度の結果と比べてみた時に、「人事給与に関する規程等が整備されているか」といった質問に関しては、大幅に改善している。改善した理由を確認していくと、他の不適切よりの回答が多い質問項目に関しても、改善していくヒントになるのではないか。
　例えば、情報が職員の間で周知されたことや、職員が納得したことが理由であるのなら、その他の項目を改善していく場合に、職員に伝わっていくような取組を行えば、評価が変わっていくのではないかと感じた。

（太田副校長）
ただ今いただいた御意見を参考にしながら取り組んで行きたい。

(3) 教育活動

（平賀委員）
この教育活動に関する項目に関しても決して評価は高いわけではない。
関連分野における業界等との連携において優れた教員の確保、教員の研修や指導力の育成などの教員の皆さんの研鑽部分、この部分が不足していると言った結果になっている。
この部分に関しては昨年も低かったと思う。教員の先生達が、なかなか時間を取れないといった事情もあると思う。この学校の特色でもある実習の多さ、そしてたくさんの病院に分散して実習を受ける、こういった部分には多くの教員が取られるだろうし、結果として時間がなかなか取れないのであろう。これらの学校の特徴、特性も影響していると思う。
この学校は、有能な看護師さんを輩出する、なくてはならない学校であるので、理念や病院の要望を満たしながら進めていくところが課題であると思う。
他校に比べても教員のマンパワーが必要であろうし、これを満たして行かないと、教員の研修時間も確保していけない。教員のブラッシュアップを行っていくための余裕が必要であり、この余裕を作って広げていかないと解決できないのではないか。
先生方の悲鳴が聞こえるような結果なので、努力して取り組んでいただきたい。

（杉山委員）
教員のブラッシュアップについては私も同感で、これに力を入れて欲しいと思う。
例えば先生方も大学院に行くなど自ら勉強し、先生たち自らが自分たちの教育の質を高め、看護の研究活動などにも取り組んで欲しい。
これを見る学生の目からも、一番身近な看護師としてのロールモデルになる。ここにキャリア教育というものがつながってくると思う。
先生方の環境を整えてあげるというのは、ベースとして必要である。受け身の研修に行かせるだけでなく、自らが研究できるような下支えがあると良いと思う。
例えば大学の教員と一緒に行っても良いし、現場の方々と一緒に研究活動を行うことができていくと繋がっていくと思う。実習場としての現場の質も上がっていくし、教育のことも理解してもらえる、そういった相乗効果も期待できるのではないかと思う。

（太田副校長）
研究という側面では、昨年度初めて、静岡県公衆衛生研究会に出題した。遠隔授業に関する取り組みを、学生へのアンケート結果などを含めて演題として出した。

（杉山委員）
一つひとつそういった活動を続けていただけたら良いと思う。

（石田委員）
評価が厳しいというのは、先生方が常に質の高い教育を行おうという意気込みの表れであると受け取っている。現状に満足せず、常に厳しい目で自らを見ていきながら、新しいものを取り入れ、社会のニーズを視野に入れながら、教育を行っていきたいという意気込みの表れがこういった厳しい評価になっているのではないかと思っているので、私はあまり心配をしていない。
気になるところとしては、「教育理念等に沿った教育課程の編成実施方針等が策定されているか」という質問項目について、やや不適切という評価が昨年度は３人であったのが、今回は 12 人に増えている。
こういった大幅に増えた部分の理由を洗い出しておかないと、来年度以降、不適切が増える危険性が出るのではないかと思う。
今のうちに、こういった大きな変化があったところについては、問題点の洗い出しなどをしておくと良いのではないかと思う。

（太田副校長）
教育活動については、教員のブラッシュアップという部分について、引き続き学内で取り組んでいきたい。

(4) 学習成果
（平賀委員）
項目別の評価点を見ると、学校運営の項目の 3.15 点というものが一番評価の高い点であった。４に近い評価の方が望ましいのであろうが、３点の評価を取れているというものが多くはない。学校運営の項目の 3.15 点で一番高く、次いで、学習成果の項目で 3.08 点、学生支援の項目で 3.08 点となっている。
学習成果の項目の中の 29 番「資格取得率の向上が図られているか」は、3.08 点を取れている。全体評価ではないが、項目別の評価で言うと、資格取得率の向上に関しては、目標を達成できているんだという先生方の評価であると思う。数少ない３以上の高評価であった。
これは、学校の説明のとおり、国家試験合格が最大にして大事な目標であり、これへの取組について、ある程度良い評価といえる。
学習成果の項目全体で見ると、「卒業生・在校生の社会的な活躍の把握」や「卒業後のキャリア形成の把握」については、昨年度も低かったと思う。
他の項目でもあったと思うが、卒業生の事を把握できていないのではないかと思う。卒業生がどういったところで活躍しているのか、かなりの人数がいると思う。
私の病院に学生が実習に来た時に、よくバスの中で話すが、各病棟の師長さんクラス、管理職になられている方が大勢いる。
私の病院以外にも多くの方がいると思うが、お互いのコミュニケーションが無いようで、こういったことを全く知らないようである。在校生が実習に来れば声をかける先輩もいるのかもしれないが、在校生と卒業生の関係が希薄であると思う。

自分たちと同じ学校で学んだ同窓であるのに、関心がないような印象があり気になる。学校のスクールカラーというものもあるのかもしれない。

先ほどの、学校の理念にも結びつくことではあるが、OB に対する尊敬であったり、一言でも会話するような身近に感じるような関係があって良い。ただ、卒業生・在校生の社会的な活躍、こういった部分に、学生側もあまり関心がないのかもしれない。

この部分をどうしたらいいのかと考えた時に、同窓会はあると聞いている。同窓生名簿というものもあると思うので、これを活発化させてはどうか。せっかく毎年優秀な OB を輩出し、活躍している方々も大勢いると思う。そういったものを大事にしていくことが必要なのではないか。

例えば、卒業式や入学式に OB が来たり、お花を贈るといったことをやっていると思う。これ以外にも、大学などでは、ホームカミングデーなどで１年に１回 OB を呼んで、自分の学校との絆を深めてもらうといった活動をやっている所も多い。少し特色のある卒業生がいれば、現役の学生に話をしてもらったり、励ましてもらったり、こういった関係があって良いと思う。

（杉山委員）

私も卒業生に関する項目については気になった部分である。私の大学では卒業生講演会というものを毎年行っている。

直近５年以内の卒業生の中で、保健師になった学生、助産師になった学生、県内の病院に勤めている学生、県外の病院に勤めている学生など４人から５人の卒業生に来てもらい、国家試験の勉強の仕方や、どういった経緯で就職先を決めたのか、今どういった仕事をしているのか等の話をしてもらっている。在校生も、そういった話があった後に、就職の相談をするなど、こういった日を１日設けている。

昨年度はコロナウイルスの関係でオープンにはできなかったが、Web で開催した。

自分の学校の卒業生の姿が見えると、相談もし易いし、行ってみようかな、相談してみようかなという気持ちにもなる。色々な道がある、色々悩みながら就職先を選んだ、色々な国家試験の勉強をしたといった、助言だけでなく困難があった部分も一緒に話してもらうと、学生の方のモチベーションも上がる。こういった取組を行っていけば良いのかなと思っている。

卒業後の就職先は分かると思うので、直近の５年ぐらいを集めてみて、そういった会を行ってみてはどうかと思う。これは、入って来たばかりの学生が受けても、好影響を与えるのではないかと思う。どういった働き方をしたいのかなといったイメージがつきやすくなると思う。

（石田委員）

退学率の低減が図られているかというところについては、前年度に引き続き、不適切、やや不適切の評価が多くなっている。実際、退学率はどの程度あるのか。

（鈴木校長）
残念ながら退学者は毎年度いる。５年遡って確認すると、退学率は、平成 28 年度が 2.1%、平成 29 年度が 2.6%、平成 30 年度が 4.3%、令和元年度が 5.9%、令和２年度が 5.3%となっている。退学者数も一桁から二桁に推移している。

（石田委員）
せっかく入学して辞めてしまうというのは残念な部分もある。
割合が２%ぐらいから６%ぐらいまで増えてきているということだが、なぜ増えているのかといった理由も気になる。退学の理由にはどういったものがあるのか。

（太田副校長）
一番多いのは成績不振。座学の段階でついて行けなくなり、１、２年生の早い段階で退学になったケース、３年生で、実習に出て実際について行けなくなり退学したケースもある。他にも家庭の事情、経済的な理由で続けられなかったといった学生もいた。また、適性を判断した上で進路変更をした学生もいた。

（石田委員）
実際に入学して勉強をしてみてや、実習に行って経験してみて、自分が看護に向いていないということが分かったことが理由であれば、退学をして違う進路に行くというのは、悪い意味ではないと思う。
退学率が上がってきていることは、気になるところではある。最近の流れとして、一つの所で頑張らないといけないといった意識が薄くなってきていることがある。やってみて自分に向いていなかったら、もっと自分に向いているところに行こうという意識に変わってきている部分もあるので、これも理由の一つであると思う。
経済的な理由の退学については、できるだけ助けてあげることができる道筋を見つけてあげたい。
退学率の低減という部分については、入学する時の動機付けにも絡んでくると思う。これは次の学生支援の項目にも関係してくることだと思う。この点も踏まえて、対策を考えていかないといけない。

（太田副校長）
退学者については少し多いとは感じている。サポートできる部分については先生方も努力している。
卒業生に関する取組については、助産学科では、昨年度卒業した学生が、先日、学校に来て、在校生の前で話をしてくれたといった事例もある。学校としての取組は少ないと思うので、こういった機会を作るなど、取組を考えていきたい。

(5) 学生支援

（平賀委員）

学生支援については平均的な評価結果であったと見て良い。この項目の中では、「学生に対する経済的な支援体制が整備されているか」については高評価になっている。県立の学校であるということ、また病院から奨学金が出ていることなど、このあたりが、学生サポートに影響しているのではないかと思う。

「高校等との連携によるキャリア教育・職業教育」については、何に取り組めば良いのか、高校とどういった連携ができるのか、ということについて、特に低いと評価した先生に意見を聞くなどすることが必要になると思う。

単純に考えると、回数が少ないということかもしれない。高校に出向いて、この学校のアピールや説明をする機会が定例的に一回だけだとしたら、印象が低くなっているのかもしれない。回数を増やすであるとか、これから入ってくる学生に対してもっとこういう取組をしたほうが良いということがあれば、検討すべきなので、学内でも意見を聞いてみる必要があると思う。

「社会人のニーズを踏まえた教育環境が整備されているか」についても、この項目の中では低い評価になっている。社会人のニーズが卒業後の進路、学生の希望や思いを表すのであれば、色々な就職先で働く先輩方と学生が話ができる機会を確保して質問を受けたりするなど、学生の不安を解消してあげる現場の取組が必要になるのではないかと思う。

（杉山委員）

41 番の「社会人のニーズを踏まえた教育環境が整備されているか」という質問について、社会人というのはどういった意味を指すのか。学生が卒業した後の社会人という意味なのか、社会人の学生を受け入れるという意味なのか、どちらか。

（太田副校長）

答えた職員にとっても分かりにくい質問になっている。

（杉山委員）

例えば看護２学科であれば、有資格者が入学している。１学科でも、福祉の仕事をした後に、看護の資格を取るために入学するといったケースもある。一方で、卒業生が卒業した後も、この学校を活用したいという意味なのか、取り方によってこの質問は大きく変わってしまうと思う。

（太田副校長）

この項目の詳細について、職員に説明をした上でアンケートを行っていない。各職員が読み取った中で回答を行っているため、ばらつきが出てしまったかもしれない。

（杉山委員）

ばらつきのあるアンケート項目については見直した方がいいと思う。

（太田副校長）
対応する。

（杉山委員）
41 番の質問項目については、両方あると思う。卒業生が活用したい学校とは、勉強したい時に先生方に相談できる環境が用意されていることだと思う。また、例えば、福祉の仕事をしながら少し勉強がしたい、これを支援できる環境というものには何があるか考えないといけない。
これから入ってくる学生の募集のうち、社会人という部分を考えるとしたら、どういった計画を考えていったら良いか。子供が少なくなっているので、社会人を大いに受け入れましょうという流れもあると思うので、これに対して準備することも必要だと思う。やや不適切や不適切とつけた教員の方が、どの着眼点で評価したのか、よく話し合った方が良い。
もう一つ、「高校等との連携によるキャリア教育・職業教育の取組」について、大学では、高大連携として、高校に行き、看護系の学校とか大学を希望する学生への模擬授業をやっている。模擬授業とは言わなくても、教員が学校に行って、専門学校ではこんな勉強をしますよ、というようなことをアピールしてきても良いと思う。
看護師や助産師を含め、意外と、高校生は良く知らないし、高校の先生方も良く分かっていないのではないか。高校の先生方への教育という意味でも、こういった取組は良いと思う。

（石田委員）
「高校等との連携によるキャリア教育・職業教育の取組」という部分については、杉山委員がおっしゃった通り、高校の先生自体が、看護学校をあまり知らないという部分があるのではないかなと思っている。これは先ほどの退学率というところにもつながってくると思う。
私は心理学の授業をやっている中で、動機付けというような話題がある時に、学生に、「なぜこの学校に入ったのか」という動機を、プリントに書かせることをしている。自分でというような主体的な理由ではなく、例えば親に勧められた、学校の先生に勧められた、といった動機を書く学生が結構いる。
資格が取れる、収入が得られるといった理由もあるのであろうが、こういった部分だけで看護学校に入ってきてしまっていいのかなといった思いもある。看護という仕事をしていくにあたり、もう少し、主体的な動機付けがあっても良いのではないかと思っている。
この意味でも、高校の進路指導という部分について、高校の先生方は、そこまで看護の仕事に詳しくないと思うので、高校の先生方を教育するというような意味も、とても大切なことではないかと思った。
高校にアプローチする方法を考えていくことも必要である。訪問する高校を卒業した在校生でも良いし、この学校を卒業して看護師として働いているその高校の卒業生でも良いと思う。高校でも進路のキャリア教育をやるので、そういった場で、卒業生の力を借りてアピールしていく方法もある。
さらにその前の中学校の段階でのアピールもあってもいいのではないかと思う。

私は中学校のスクールカウンセラーもやっているが、職場体験というものを中学校でもやっている。中学校の各学年で色々な職業について調べる。親や家族をたどることが多いが、実際に職場に行って１、２日間体験させてもらうといった取組を中学校でもやっている。医療系の職種、病院に行くこともある。中学校でやっているキャリア教育というところにも、静岡県立看護専門学校があるということ、高校を卒業して看護学校に通い、国家試験を受けて看護師になるといったことを、中学校段階から伝えていっても良いと思った。

（太田副校長）
現在も、高校に出向いて説明する機会を持っている。これの実施の仕方という部分について、工夫していく必要があると思った。先生方の御意見を参考に進めていきたい。

(6) 教育環境

（平賀委員）
去年から今年にかけて、新型コロナウイルス感染症の関係で例外的な状況である。異常事態であり、先生方も御苦労されていると思う。こういった意味で、教育環境の評価は難しいものがあると思う。
新型コロナウイルス感染症の関係で言うと、45 番の「防災に対する体制の整備」という評価項目が該当すると思う。いずれ通常状態に戻ると思うので、実習施設や教育上の備品設備について、不足するところがあれば、ピックアップをして要望して進めていく必要がある。
８年前に、健康福祉部の要請で、この学校の強化検討委員会を行なった。その時の意見書も残っていると思う。結果、図書やプロジェクターなど新しい設備が整備できたということもあった。この学校の発展に資するためには、１回限りで終わるのではなく、継続性が必要である。設備に不足する部分があれば、通常状態を想定して、要望を上げていって欲しい。
評価点については、設備関係が 2.35 点、これに対して防災関係は、2.73 点と高い。これは新型コロナウイルス感染症への対応がしっかりと出来てているのではないかと評価する。これに比べて、43 番「教育上必要な施設・設備の整備」、44 番「学内外の実習施設等の教育体制の整備」については、そこまで高い点数ではないので、これを念頭に改善させて欲しい。

（杉山委員）
施設や設備の問題はお金が関係することではあるが、出来る限り、最先端のもので、学生が教育を受けられるように努力はお願いしたい。
特に、昨年度は新型コロナウイルスの関係で、インターネットの環境等の整備が進んだと思う。そういった資材も活用しやすくなっているので、公開されているようなものもうまく活用したりして、取り組んでいって欲しい。また、図書の方もしっかり整備し、図書から学ぶといった機会も確保していただきたい。
もう一点、現在は新型コロナウイルス感染症の影響で難しいとは思うが、インターンシップへの参加状況はどうか。就職する病院、施設には、必ず行くようにはしているか。

（太田副校長）
　就職先がある程度決まっている学生については、インターンシップに積極的に参加している。新型コロナウイルスの関係で、どうしても参加できない状況もあったが、行ける学生については行っている。

（杉山委員）
　私の大学で、就職試験で落ちた学生がいる。理由として、インターンシップに参加していなかった、という要素があった。就職を希望する病院には、必ずアクセスし、最低限インターンシップに参加するなど、学生の指導が必要であると思う。奨学金をもらっていたから安心していた学生で落ちた事例もある。丁寧に指導を行って欲しい。

（石田委員）
　44 番の質問項目の海外研修については、この学校に本当に必要なのか。やや不適切や不適切と回答した方は、この部分を理由としてしまったのではないかと感じた。実際に海外研修というものはあるのか。

（鈴木校長）
　看護師、助産師を育てる養成所という意味で、この海外研修という評価項目については、必要性について今後考えたい。

（石田委員）
　こういった一言につられて、やや不適切や不適切が増えてしまうこともあると思うので、設問の語句も精査した方が良い。

（平賀委員）
　インターンシップは先生方のおっしゃった通りだと思う。今は、看護分野も、４年制の大学に動いているのが全国的な流れであると思うし、大学の看護学部ではこういった海外研修なんかもあるのかもしれない。この質問項目に関しては、別の要素が入ってしまっているように感じた。４年生の大学だと、研究も必要だろうし、看護師さんで留学をしていた方も知っている。この質問項目は、一緒くたで表現されていると思うので、検討した方が良い。
　もう一点、施設整備の部分に関係することだが、教員のための看護関係の雑誌、専門誌は整備されているのか。

（太田副校長）
　定期購読で購入している。

（平賀委員）
　例えば、精神科看護などといった専門誌は何種類もあり、看護研究という雑誌もある。こういった雑誌をしっかりと取ることは、教員のキャリアアップや、先ほどの、この学校の理念の向上に資する活動になると思う。教員の間で自由に閲覧できるようになっているか。

（太田副校長）
　各雑誌は教員が自由に閲覧できるようにしている。

（平賀委員）
　学内に小部屋の研究室があると思う。研究の側面も充実させていって欲しい。

（太田副校長）
　多様なご意見を頂いた。実現できる部分から取り組んでいきたい。また、海外研修の関係などについては、当校が専門学校というところも踏まえて、この設問項目についても精査していきたい。

(7) 学生の受け入れ募集
（平賀委員）
　特に大きな意見はないが、この学校も新型コロナウイルス感染症の関係で、学生募集活動には苦労していると思う。
　４年生の大学を志す人も増えていて第一志望を大学としている学生も多いと聞く。また、授業料の金額や設備が揃っていることを理由に、第一志望は県立学校、第二希望は私立学校を受けていると聞いている。こういった動向は最近はどのようになっているのか。応募状況はどのようになっているのか。

（太田副校長）
　看護１学科は、推薦入試に関しては昨年度より応募が多かった。一般入試については昨年よりも少し少なくなった。４年制大学が近くにできたが、トータルとしては影響は大きく出ない結果となった。
　一方で、２学科については、准看護師養成所が県内に一箇所しかないということもあり、応募者数が減少傾向にある。応募者数を増やしていくことが、一つの課題にもなっている。
　助産学科については３年目を迎えている。応募人数については大きな変化はないが、出願者の所属が病院からクリニックに移ってきている。

（杉山委員）
　２学科は、県外の人は何人中何人いるのか。

（太田副校長）
　今年度入試については、４人合格したが、入学したのは１人で県内の学生である。

（杉山委員）
　１学科の学生の状況はどうか。

（長谷川学科長）
　１学科は、県外の学生が２人いる。

（杉山委員）
　２学科は、残さないといけないのか。

（太田副校長）
　学校だけではなく、県庁と合わせて検討をしていくため、様々な情報を今年度収集していく予定である。

（杉山委員）
　以前から状況は大きく変わっていないと思うが、費用対効果としてどうかというところは考えてしまう。

（杉山委員）
　学生募集については、私の大学でも 2025 年問題について戦々恐々としている。学生の数も減っていくので、応募の競争率が低下していくという状態にある。本腰を入れてリクルートをしないといけない。
　学生募集については、他県までリクルートに行っているような事例もある。いかに魅力のある学校なのか、看護師が魅力のある仕事なのかという部分をアピールすることも大事で、先ほど石田委員もおっしゃってたように、中学校からプッシュしていくようなことも必要なのではないかと感じた。高校や中学に行き、今の看護職の仕事を PR していく活動も、今後は、本腰を入れていかなければいけない時代なのかなと思っている。

（石田委員）
　助産学科の学生は県外から来ていたと思うがどうか。

（廣瀬助産学科長）
　今年度、昨年度ともに１名いる。U ターンを狙っている部分もあるので、出願時に県外の大学に在籍し県外に在住していた学生はいる。県内で活躍する助産師を育てるということも大切にしている。

（石田委員）
　出身は県内で、大学は県外に行っていたということで、実家は県内ということか。

（廣瀬助産学科長）
その通りです。

（石田委員）
新型コロナウイルス感染症の関係で、学生募集というものも、なかなか外に出ていきにくいという部分はあると思う。
高校でも中学でも良いので行ってみて何かやってみる、これが新聞で紹介されると、行った学校だけでなく他の学校にも広がっていくというような事例がある。ひとつの学校でやったことが他の学校でも紹介してもらえるといった効果が期待できる。
たくさんはできないだろうから、一箇所でやったことが広がるような手段で取り組むと、より効果的ではないかと思う。

（平賀委員）
１学科は応募が減ってないということで安心した。県立なのでそれも魅力の一つとして学生も受験するんだろうと思っていたが、杉山委員の話を聞くと安心はできない。
私学はより大変なんだろう。私学の入試情報を見ると複数日入学試験日を設けるなど、様々な努力をしている。少子化の状況を踏まえると、県立の学校も安心していてはいけない。
看護の日というものがある。病院をオープンにし、高校生に看護師のユニフォームを着てもらうなど、病院見学の機会を設けている。看護の日は病院のもので、専門学校では違うのかもしれないが、教員の先生達は皆看護師であるので、看護の日にオープンキャンパスをやるなど、希望者がいれば学校内を案内したり、将来の看護師さんを集めるといった方法もあると思う。知恵を出し合って学生募集をやっていかないといけない。
２学科については、私も昨年度から教えており、今年度はマンツーマンで指導している。悪いことではない。授業の仕方もあるが、学生は集中して授業を受け、非常に濃厚な授業となっている。
８年前の強化検討委員会でも２学科のことは話題になっていた。通信制にした方が良いのではないか等、様々な意見が出ていた。
県内の准看護師の養成所は減り、浜松市医師会の１箇所だけになってしまっているが、全国的には准看護師の数は少なくなく、相当な数がいる。
日本医師会については准看護師を擁護する立場である。医師会がやっている准看護師養成所は、県内の浜松市の一校を含め、全国的には結構残っていると思う。
准看護師は、年々減ってはいると思うが、全国的には相当数いると思うし、県内にも准看護師の方はいる。当時の強化検討委員会では、２学科は残すといった意見が大勢であったと思う。
ただ、実情を見ると入学生がかなり減ってきているのは事実なので、様子を見ながら先行きを見据えて行かないといけない。２学科の学生を集める方法、アピールをしたり学生が増える方策を検討していく必要がある。廃止する前に、やるべきことはやっていかないといけない。

（太田副校長）
杉山委員から何かあるか。

（杉山委員）
様々な要素等があると思うので、本課とも検討しながら進めていって欲しい。

（太田副校長）
学生募集の関係は学内でも知恵を出し合って取り組んでいきたい。また、２学科の関係についても、本課とも相談しながら進めていきたい。

(8) 法令等の遵守

（平賀委員）
この項目については評価平均が 2.63 点で、９項目の中で最も高く、全体的に、法令等の遵守に関しては評価が高いと思う。
中身を見てみると 51 番の「自己評価の実施と問題点の改善を行っているか」についての評価が低い。自己評価及びその評価については、毎年実施していくということでスタートしてると思うが、毎年続けていくことが重要である。
また、年度比較をしていくことが必要であると思う。単年度で評価をして、その評価をここで検討するというだけでは、単発で終わってしまう。昨年との比較で、どこが改善しているのか、どこが改善していないのか、これを検討することが大事であると思う。
一回一回の評価でも、これだけ意見が出るので、これを尊重する必要もあるが、取組に効果があったのかという点について、毎年続けるのであれば、年度比較をして活かしていくと良い。
これを踏まえると、今までの話にもあったように、評価設問が当校に適合しているのかどうかという問題も出てくる。これをどう取り扱うかということも検討して欲しい。これは、51 番の「自己評価の実施と問題点の改善を行っているか」の設問に対する意見としてお伝えする。

（杉山委員）
法令の遵守については適切に行われることは、原理原則だと思う。運営等の部分についても、そこを大事にしている結果だと思うので、比較的高い評価になっている。
不適切よりに回答している方は固定されていて、他もかなり厳しい評価をしていると推測される。アンケートの部分だけでは見えないので、具体的にはどうなのかという少数派の意見を聞きながら、なぜ不適切と評価をするかについて明らかにして、検討していくと良い。
「自己評価の実施と問題点の改善を行っているか」の評価点が少し低い点については、前年との比較や、昨年度取り組んでどうだったのかということも含めて振り返ってもらい、内部で検討してもらったら良いと思う。

先ほどまでの質問項目で言うと、合格率や退学率、資格の取得率などについては、経年変化が分かる資料を、アンケート時に出すと良い。客観的なデータも併せて提示しながら評価をする方が良いと思う。そういった示し方も重要。

もう一つ評価の仕方であるが、これは教員だけのアンケートになっている。学生への授業のアンケートは行っていると思う。私の受け持っている授業でも、授業アンケート結果が出していただき、これをもとに講義も行なっている。授業ごとのアンケートではなく、全体のアンケートや学校運営に関するアンケートを学生にとり、学生の意見も取り入れたら良いのではないかなと思う。社会人を経験している学生もいる。学生の募集なども、学生が良いアイデアを持っているのではないかと思う。

（石田委員）

49 番の「法令等の遵守」や 50 番の「個人情報保護の評価」が高いのは、今までのお話の通りだと思う。51 番の「自己評価の実施と問題点の改善を行っているか」ということについては、昨年度と比較して今年はどうだったのかというところを検討していくことは大事だと思う。

特に前の年度で、不適切や、やや不適切の人数が多かった部分が、次の年度でどのように改善しているのかを見ていくことが大切だと感じている。この会議自体がまだ２回目なので、その辺りの積み重ねも必要になってくる。

職員それぞれが学校全体の状況を把握しているわけではないと思うので、そういう意味ではイメージで不適切の評価をしてしまっている部分もあるのかもしれない。

職員が評価をつける時には、判断基準となるようなデータをつけることが必要である。各職員にも役割があるので、自分の領域とは異なる部分の評価をするときには、退学率の推移や入試の志願者数など、何か判断基準になるような数値等が必要になる。自己評価を行う際には、そういったものを同時に提示しながら行うことが必要なのではないかと思う。

（太田副校長）

退学率等の推移などについては、資料としては持っていても、職員全体には提示していなかった。こういった自己評価を行う上でも、ひと工夫が必要であると感じたので検討して取り組んでいきたい。

(9) 社会貢献・地域貢献

（平賀委員）

この項目については、評価平均が 2.17 点で、全アンケート項目の中で最も評価が低かった。中身に関しては、55 番の「地域に対する公開講座等を積極的に実施しているか」が 1.88 点で特に低い。確かに新型コロナウイルスの影響はあると思うが、昨年度もこの項目は低かったと思う。

今までもやっていると思うが、学校祭など、一般の人が来れるような機会を作る。社会貢献と言うかは分からないが、自分たちの勉強の成果や研究の成果を発表する場にもなるので、

一種の公開の場になると思う。社会貢献・地域貢献というのはなかなか難しいことであると思う。

コロナの影響は一旦置いておいて、学生のボランティア活動や学校の教育資源や施設を活用した社会貢献の評価については、コロナ禍以前も高くはなかったと思うので、そこを問題にすべきであろう。

卒業生に対し、図書室を利用しても良いよ、貸出もできるよ、そういった呼びかけをやっていると聞いたことがあるが、全体に向けて言っているかというとあまり見当たらない。

また、学生のボランティア活動については、自分にも心当たりがある。私の病院でも「ふれあいフェスタ」というものをやった時に、この学校の学生に手伝ってもらった。

社会とのつながりという部分には、OB とのつながりもここに入ってくると思う。新型コロナウイルス感染症の制約が無くなったときに、さらにアクティブに進めていく必要がある。

（杉山委員）

学生のボランティア活動の話があったが、私の大学でも、地域貢献というものはとても力を入れている分野でもある。

例えば、住民が自主的にやっているお年寄りの介護予防活動など、そういった場所に学生が出向いて行くというような取組を毎年進めている。

学生にただ行ってもいいよ、と言うだけではなかなか行かない。先輩達が行くことでルートを作り、先輩が行っていた所に後輩が行くというように、道筋を最初は作ってあげるという方法が一つある。また、学生は、教員と一緒だと、すんなりと入り込めることが多い。

例えば、今だと、新型コロナウイルスの予防接種において、会場整理を含めて、圧倒的に人が足りていないという現状がある。そういったところにお手伝いに行くと言ったことはありかなと思っている。

県立看護専門学校はワクチン接種の状況はどうか。

（太田副校長）

学校としてはまだできていない。

（杉山委員）

大学ではスタートした。県立総合病院の協力を得て、看護と薬学、食品関係の学生がワクチン接種を優先的に受けさせていただいているので、こういったボランティアにも参加し易くなっている。

例えば、夏休みの期間を利用して、こういったワクチン接種の会場整理でも何でも良いのでお手伝いに行く。お手伝いに行ったらそれを新聞などのメディアに PR するというような、ボランティアのやり方もあると思う。

公開講座や県民の日にあわせて、親子を対象にした教室をやっている。看護に直接は関係無かったとしても、模型を見せたりクイズ形式にするなど、夏休みの研究、体験学習に使ってもらうようなことをしている。他にも、赤ちゃんの模型を使いながら沐浴などを体験してもらうなど、公開講座などと堅苦しいものでなくても良いので、そういったような地域貢献

もあるのではないかと思う。看護というのは、そういったところから入るよということを、親子に知ってもらうというようなものでも良いと思うので、あまり堅く考えずに取り組んで欲しい。

（石田委員）
　新型コロナウイルスの影響で公開講座というものはとてもやりにくかったと思う。これまでも、オープンキャンパスや学校祭、文化祭などを通し外部に開放してということもやられていたと思う。新型コロナウイルス感染症が収束し、これらを再開できるようになれば、評価も改善していくのではないかなと思う。
　学生のボランティア活動についても、杉山委員がおっしゃっていたような方法が、すごく良い方法ではないのかなというように感じた。

５　閉会

（太田副校長）
　新型コロナウイルス感染症の状況が落ち着き、状況が許すようになれば、地域貢献等の取組も広がりを見せることができると思う。公開講座についても、やり始めて行きたいとは思っているが、制限等がまた出てきてしまったという部分もあるので、今後の対応を考えていきたい。

（鈴木校長）
　各委員の先生方からは、多様な御意見をいただき感謝申し上げる。私は４月にここに赴任し、自己評価については、昨年度の活動について評価が行われたということで見させていただいた。先生方から御意見、具体的なお話を伺うことで、具体的なイメージが湧いたという部分もある。また、設問に関する御意見もあった。教員の意見を聞く、学内で話をするといった御意見もいただいた。先生方の御意見を踏まえて、検討等を行なっていきたいと考えている。以上をもって、令和３年度静岡県立看護専門学校学校関係者評価委員会を終了する。